
流星戦隊コスモマン

ゆとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星戦隊コスモマン

【Zコード】

N7221D

【作者名】

ゆとり

【あらすじ】

遙か銀河のかなたに存在する宇宙を守る組織コスモガーディアン。そこからある日悪の組織デッドロンの4幹部が逃げ出す。コスモアースは逃げ出した4幹部によって壊滅状態にされるが若き5人がデッドロンを追いかけ地球へと行く。しかし、その際隊長レイはやられ、地球人の煌川翔と戦うこととなる！

1st stage 『宙からの来訪者（前編）（前書き）

やつと書きました。半年（やじまでも長くないと思ひにがい・・・）くらい構想してた物です。まだまだ未熟ですがどうぞ！

1st stage 宇宙からの来訪者（前編）

地球より遠くはなれた銀河にそれは存在した。

宇宙警備隊コスモガーディアン、それは全宇宙を監視し悪事を働く惑星や宇宙海賊を取り締まり、全宇宙の安全と平和を守るために結成された組織である。

そのコスモガーディアンと長年敵対し、多くの惑星を滅亡させ自らの利益だけに動く組織デッドロン。

今この二つの勢力が地球を舞台に一人の地球人を巻き込んで熾烈な戦いを繰り広げる。

【流星戦隊コスママン】

第78銀河系ペゼロス。そこにコスモガーディアンの本部基地コスマースは存在する。中にはかつて重大な犯罪を起こした宇宙囚人

たちが監禁されている。

「はああ～眠いな」

「まあそいつ言つたてこのランクVVV囚人の部屋の見回りが終われば今日も終わりだつて」

二人組みの警備員のような服装をした宇宙人達が自らの頭の触覚から出たライトで辺りを照らしながら歩いている。

「まあそうだけど・・・・一日の終わりにVVVだぜ？おかしいよ」

このコスモガーディアンでは捕まつた宇宙囚人は犯罪者ランク別に分けられ監獄されていてC~SSまであり、SSは史上最悪の宇宙囚人たちの宝庫である。

「だよな～、まあパパッとやつて寝ようぜ！」

「おうよー、そうだな」

二人はカードキーでランクVVVの囚人たちが眠る部屋を空けた。扉が開くと異様な寒気がする空気がぶわっと流れ込む。

今現在VVVランクの部屋には4人の宇宙囚人が捕らえられている。

いつもは「ここからだせーーーーー」とかつるさこはずだがいつもと違つて今日は静かである。

「妙に静かだな・・・・ーーおこコレーー！」

片方の男が叫ぶ。

「え・・・・アッ！－！－！大変だあ－！」

そこには空っぽの4つの牢獄部屋があった。一人はすぐさま胸にあ
る緊急用トランシーバーに手をかける。

「た・・・・大変です！－！SSランクの囚人が脱走しま・・・ぐ
わあああああ」

『どうした？ A - 02？ 応答しろ！－！繰り返す・・・』

警備員の一人は後ろからの何者かに一撃で殺されそのままトランシ
ーバーと壊された。

「く・・・うつさいなハエ2匹だな」

茶色い大型のライオンのような生物で、体の至る所に牙が生えてい
る。彼こそSSランク囚人の一人元デッドロン幹部殺戮の獅子ヴァ
ルガスである。

「それくらいにしどきなさい・・・・・ヴァルガス」

赤いマントに身を包んだ女が天井からゆっくりと降りてきた。彼女
こそSSランク主人の一人元デッドロン幹部、終末女帝レイナで
ある。

「おう、レイナ。早く行かんとデッドロン様が怒られてるだろうし
な、バンドルとシャムンズはどうした？」

レイナは一つの死体を手から放つたビームで抹消させるとヴァルガスのほうに顔を向けた。

「バンドルは他の捕らえられた仲間達の冷凍保存を取りに、シャムンズはここから出るための戦艦を用意しに言つてるわ」

「わづか……なりこの辺でも破壊して時間潰すか

そつ言うと、アンガスはニヤリとして、雄たけびをあげるとコスマースを破壊し始めた。

司令部には焦りが走っていた。すでに非常を知らす警報はさつきからつるむたこ音を上げて赤いランプを光らせながら唸つている。

「Bブロックから冷凍保存宇宙囚人がどんどん取られていつてます
！…」

「対応に回っているD班全滅です！…」

オペレーターたちが忙しそうに現状を伝える。その現状に頭を抱えている人物がいる。

コスモガーディアン総司令官デルベットであった。地球人と似たような体系をしている男である。

「ぐう・・・・・防御扉も通用せんし・・・なら・・・・・

デルベットは近くにあつたボタンを押す。すると田の前に小さな女性の科学者のホノグラフィが現れた。

『はい、どうなさいましたか？』

「シャムーット！－コスモアブネットースの調子はどうだ？！」

コスモアブネットースそれは、コスモガーディアンが開発した最新の戦闘スーツの事である。宇宙科学金属を粒子レベルまでに圧縮しそれを身にまとつことで基礎運動能力などが数段向上するスーツである。

現在は赤、青、黒、黄色、桃色の5色のタイプがほぼ完成状態に入っている。

『使あうと思えば使えます、司令』

デルベットは頷くと指をパチンと鳴らした。すると中年くらいの男性らしい格好をした宇宙人を中心に男性3人女性一人の宇宙人5人が現れた。

「ガーディアン最強部隊、SN。^{スペーツナイツ}君たちに任務を与える、今から新作スーツコスモアブネットースを装着してすぐに危険度SUSの宇宙囚人を始末及び確保してくれ」

隊長らしき男が前に出た。

「了解しました。では、すぐに準備に移るので装着させてください」

「ではコレを使ってくれたまえ。コスモブレイザード」

そう言つてデルベットはSNの5人に青と銀色を主体としたブレス

を渡した。

5人は腕にそれをすぐに装着する。

「変身方法は中心部分の赤いボタンを押して『コスモチョンジャー』の掛け声でロックがはずれこの基地の科学技術室からコスモアブネットスースが電子粒子として出てきて君たちのみを包んで変身できる」

5人は出るべつての話を聞いて目を合わせ頷くと構えた。

「「「「コスモチョンジャー！！」」」

5人は赤いボタンを押してそう叫んだ。

コスマブレイザーからは小さな粒状の物が光を放ちながら5人を渦を巻きながら包んでいく。光が止むとそこには5人の戦士がいた。

「さあ、頼んだぞ！－NN－！」

「了解！」
ラジャー

そう言って5人は走つて司令部から去つた。

ヴァルガス、レイナ、シャムンズ、バンドルの4人は既にそれぞれの目的を果たしていく後はこのコスマースからの脱出のみであつた。

「さあて、そろそろ！」の悪々しいコスモアースから出よひぜーーー。」
小柄で青い狼のような宇宙人である超悪星バンドルが大きく体を伸ばして3人に言った。

「ふ・・・忘れ物は無いわよね？？あなたが一番心配なのよ」

レイナが嫌味っぽくバンドルに言ひ。

「うひさいなーー！シャムンズもう大丈夫なの？」

全身黒いマントで身を隠したシャムンズと呼ばれる男に対してバンドルは大声で聞く。そう四天王の最後の一人破邪鬼シャムンズである。

「・・・・・ああ。メインエンジンとか全てチェックして問題は無い」

「さて帰るうぜ」

ヴァルガスが一コ二コ笑いながら言つた後突如足元にビームが放たれた。

「ぬう？！誰だ・・・・？？」

「そこまでーーー宇宙囚人ーーー」

隊長格である男がテッドロン元4幹部に向かつて叫ぶ。

「く・・・・・まだうさいのが残つてたか、しかも何だあれ？？」

「5色のへんなんだな・・・・・・あれなんだよ」

5人はそんな事に聞く耳を持たず腰に装備されている銃に手を伸ばす。

「コスモガンナー！」

そつ言つて引き金を引く。青白い銃からは無数の光線が放たれる。

「ぐおおお・・・・・なんだ？！」

「くう・・・・・・」

元幹部たちは一回宙に飛び、それを確認するとUNの5人も跳躍をする。

「うおおおおおお！…！」

ヴァルガスはその大きな口から1万度の炎をUNの5人に向かって噴出す。

レッドに直撃してそのまま地面に直撃する。

「Uの・・・・・・・・コスモランサー！…！」

コスモガンナーは変形して短い刀となつた。それを構えて突っ込むブルー。

「喰らえ！――ヴァルガス！」

地面に落ちていったレッドを見つめていたヴァルガスには隙が出来ていた。

「ぐ・・・・しまつた！――」

「やうわさせないわあ！――はあ――！」

レイナがグリーンの下から、ビームを田から放ちブルーを打ち落とす。

イエロー、ブラック、ピンクの3人もシャムンズの黒いマントから出る触手に掴まつて身動きが出来ない状態であった。

「…………そろそろ終わりにさせせてやるつい――」

デルベットは両腕に高エネルギーを集めしていく、見る見るうちにエネルギーは膨張していく。

「喰らえ！――デスマッチシャア！――！」

一気に両腕を前に突き出すとエネルギー波が発生し5人の5人を包み込んだ。

光がやむとそこには5人の制服、「スマブレイザー」と、砂が残されていた。

「つけ。大した事無かつたな！」

砂に向かつてつばを吐き出すヴァルガス。

「まあ・・・・とりあえず行こうとしようかね

バンドルが笑顔で言う。

「ええ・・・・“地球”へね・・・」

そうレイナが言つと4人は宇宙船へと乗り込んだ。

1st stage 宇宙からの来訪者（中編）

東京都新宿区。まだ昼間なので当たり前のように人は多くいる。ランチ時なのでいつもの店に行く。「連れや、サラリーマン。何しに来るかわからない人。流行の姿をした若者。などいろいろである。

そんな中一人の青年がいる。見た感じは大学生である。

「ふう・・・・今日も駄目だつたな・・・・」

就職活動中の青年煌川翔である。2流大学に通う普通の大学生で来年には就職を控えている。

特に将来やりたい事も無くとりあえず片っ端から会社に出向かっているのであるが全く手ごたえが無く少し不安を感じている。

「・・・・ん??」

それをたまたま見上げるとそこには次元の歪みが発生していた。黒いものが渦巻いて見る見るうちに太陽は隠され昼と言ひて暗黒に包まれた。

「な・・・・何が起きるんだ・・・・?」

翔は都心部の方へ向かつて走り出した。

「コスモシップほぼ壊滅です・・・・・・・・」

「何て事なんだ・・・・・・頼みのUNまでもが・・・・・・」

デルベットは椅子に深く腰をかけた。コスモガーディアン始まって史上最悪の状況である。

4人のSUVランク囚人を捕まえるのに約1世紀はかかった。その努力がただ一瞬のひと時だけで水の泡になるのである。

「・・・・なんとかせねば・・・・コスモガーディアンに残つてゐる部隊はあるのか?」

出るべットがオペレーターに声をかける。オペレーターはすぐにタイピングをしながら田を凝らし残りの部隊を探す。

オペレーターが検索を終わり出るべットの方が向くがその表情は少し不安そうであった。

「一部隊だけ残つてました・・・・・」

「何処の部隊だ?」

「新人だけの部隊であるUA班です」

デルベットはそれを聞いて目を丸くしてしまった。

「本当にその部隊しか残つてないのか……？その部隊はリーダーですか。3年目他の隊員は今年入隊したばつかじやないか！！」

「でもコレが現状です……」

「しかし……隊長のレイ君なら、あの戦闘能力だ……きっと何とかしてくれるだろ？」

デルベットはさう言つとレイたちSA班を自らの前に呼び出した。

しばらくして5人の若い青年達が不安そうな表情でデルベットの前に現れた。

「総司令……なんでしょうか？」

SA班隊長であるレイは出でベットに對しそう問う。

「ウム。先ほどS級衆人が逃げ出したのは知っているであつたな」

5人は頷く。

すると緑色の頭髪の少年が手を擧げる。

「ちよ……いいすか……そのもしかしてですけど……」

「ああ。そのもしかしてだ。君たちにはこれから奴らデッドロボンを追いかけて欲しい」

デルベットのその言葉に全員が硬直する。

「ちよ・・・・・俺立ちまだ入隊して1年経つか経たないかですよ？」

する遠くの奥から戦闘指揮官であるジンが現れた。5人はそれに気付くと敬礼をする。

「手を下ろしてくれたまえ」

5人はその言葉と同時に手を下ろす。

「確かに君たちはまだ未熟なところがある」

ジンは5人の前を歩きながら5人について語る。

「だが、君たちの潜在能力の高さは確かだ、奴らとの戦闘できつと成長するであろう」

ジンはそう言つとデルベットのほうを向いて頷く。デルベットはそれを見ると口を開いた。

「と畜うわけだ。なので君達にコレを片手に地球へ言つて欲しい」

デルベットはそう言つて5つの「コスモプレイヤー」を差し出した。

「これは・・・・?」

レイが腕に着けながらデルベットに聞く。

「コスモプレイヤー・・・先ほどようやく完全完成した。我々コス

モガードイアンの最新計画コスモマンプロジェクトの一つだ、それを装着した状態で変身キーワード『コスモ Chernジャー』の掛け声で最強の戦士コスモマンへと変身できる

「デルベットの説明を聞きながら5人はコスモブレイザーを見る。

「すげーーー俺ら最新兵器身につけてるのかよーーー」

隊員の一人である最年少のロウは目を輝かせてコスモブレイザーを見る。

「……わかりましたSA班 地球へ向かいます」

レイは強気の表情でデルベットに言った。すると急にホログラフィーのシャムニットが現れた。

「なら、5人にとっておきのものがあるからすぐに第3ブロックに来て頂戴」

そう言わされたので5人は第3ブロックへ向かった。

第3ブロックに着くと5人の目の前にはまだ完成したばかりの5機の真新しい宇宙戦闘機があつた。

「これはーーー?」

隊員の一人シンは不思議そうに5機の宇宙戦闘機を見た。

「…」れらは、あなたたちの専用新型宇宙戦闘機「コスモジエット左から1～5よ」

奥からシャムニットが現れそう言つた。

「コスモジエット・・・・・」

レイはただただ最新兵器の勇猛な姿を見ることしか出来なかつた。

「操作方法は変身したら自動的に脳に伝達するよ變成してくるわ。発進準備もできてるわ」

シャムニットの言葉を聞き5人は顔を見合せ頷いた。

「…」コスモジョンジャーーーーーーーーーーーーーー

5人は変身コードを叫びながら赤いボタンを押した。粒子状になったコスモアーナットスースが射出され5人を包んでいく。

変身が完了するとすぐにレイは1、シンは2、ロウは3、女性隊員であるリカとミカはそれぞれ4、5のコスモジエットに乗り込んだ。

「発進口開いて…!…!」

シャムニットが叫ぶと前方の大きな扉が開き、目の前に綺麗な蒼い宇宙が広がっていた。

「準備はいいかしら?」

シャムニットの問いかけにレイはふと微笑むと返答した。

「いつでもどうぞ」と。

すると5機は勢い良くジェット噴射をして広大な宇宙へ飛び出した。

地球では翔が一人暗黒の渦の近くに立つて呆然とその光景を見ていた。

雷鳴が轟き、空が荒れて静かにだが何かはわからないが轟音がしていた。

「何が起ころうとしているんだ・・・・?」

近くを見ればこの異常事態である当然マスクも大きなカメラを片手に黒い渦を撮っていた。

自衛隊もこの異常事態にあわせ空軍が近くまで行き偵察をしているようだ。

そして次に瞬間であった。バリバリと言ひ音を立て黒い渦から大きな黒い物体がゆつたりと姿を現した。

何かの戦艦の様であるがそれは確実に生きていた。呻き声を上げながら岩のように薄い緑色のような殻を徐々に出していくそれはこの世のものとは思えなかつた。

「何なんだ今日は・・・・?厄日だったか・・・?」

翔はそんな事を言いながらそれをみていた。

その戦艦の様な物こそが、宇宙最凶最悪の『テッドロン』の機動要塞生物ベボロイスであった。

ベボロイスは上空に現れるとじぱりくそのまま動かなかつた。

それを見て自衛隊はすぐさま戦闘機を発進させたらしく翔の後方から4機くらいの戦闘機が騒音を立ててこちらに向かってきていた。

「・・・・・自衛隊が動いたのか・・・・・」

翔はそれを見て少しほつとしたがそれはつかの間の出来事であつた。自衛隊がすぐにミサイル攻撃をするとミサイルはベボロイスに吸収されそれどころか5機の戦闘機さえもあつという間に吸収してしまつたのであった。

「な・・・・? ! なんだよそれ・・・・」

翔は眉間にしわを寄せてただただベボロイスを見ることしか出来なかつた。するとベボロイスは口から光線をビル街に向けて突如発射した。

無論ビルは砂埃を上げて崩れ落ちていく。人々はすぐさま逃げ惑う。しかし、翔は逃げなかつた。いや、本当のところを言つと彼は逃げなかつた、だが何かが彼をその場に残していた。

次の瞬間ベボロイスの一部分に爆発が起きた。翔はそれを見る。するとそこには5機の見慣れない戦闘機が青い時空の歪みから表れてベボロイスを攻撃していた。

「また・・・何か現れた」

翔は突如現れた5機の戦闘機に再び不安を募らせた。

「やつと追いついたか・・・・・・」

シンはコスモジエット2のコクピットからベボロイスを見てそう言った。

「デカいんだな・・・・・」いつ倒せんのか??」

口ウは少し不安そうに呟く。

「倒せるのかじゃない・・・・倒すしかないんだ・・・・宇宙の平和のために!!」

レイはそう言ってレバーのボタンを押した。それと同時にコスモジエット1の先頭部分の銃口からビームが放たれる。

それはベボロイスに直撃していたる部分で爆発が起こる。シンたち4人もレイに負けじと攻撃を開始する。

『グギヤアアアアアアアア・・・・・・・・! ! !』

ベボロイスは呻き声をあげもがき苦しみはじめ攻撃をやめた。

ベボロイス内部ではこの状況に脱走した4人の幹部は渋い表情をしていた。

「まさか・・・・・コスマガーティアンにあんな物があつたなんてね・・・・・」

レイナは画面を見ながらそう呟いた。

「まあ・・・そう簡単にこのベボロイスは落ちねえよー。」

ヴァルガスは牙を出してニヘニヘと笑つていて案外余裕そうであった。

「で・・・・・どうする・・・・・? 新幹部である宇宙騎士・・・・」

と、デルベッドが言おうとするど4人の幹部の近くにいた一人の蒼い髪の男が腰に装備していた剣をすぐに抜刀してデルベットの首元の方へ向けた。

「・・・・俺を呼ぶときは『その名』では無く、グラリスと呼べ・・・・」

「わ・・・・・悪かったよ・・・・・グラリス・・・・・」

デルベッドがそう言つとグラリスはゆっくりと剣を元に戻した。

「…………俺が何とかしてくる」

そう言ってグラリスは4人の田の前からゆっくりと去った。

「…………なんか気に食わないんだよな…………あの青い戦士さん」

デルベットが頬を右の人差し指でポリポリと搔きながら言った。

ベボロイスの攻撃をかわしながら着実に5機のコスモジエットは攻撃をしていた。

「わあ凄い私たち…………あんな化け物に太刀打ちできるなんて…………」

「//リカは少し手を震わせて言った。

「//リカちゃん、今は戦闘に集中しないと駄目よ…………こいつを倒してから一杯お話ししよう。」

「やうね…………//リカちゃん…………」

「み…………//リカちゃん…………」

そんな事をいいながら//リカはフォーメーションを組み攻撃していた。

一方コスモジエット1に搭乗しているレイは上手く相手の攻撃を避けながらビーム砲を撃っていた。

(「コレなら何とかなる……俺たちがこの星を救える……）

レイはそう思うだけで体の中から何か熱くなれる気がしていた。だが、彼のその一瞬の甘さが命取りとなつた。

「…………もうつた

ベボロイスの屋上からコスモジェットーを見ていたグラリスは一気にコスモジェットーの方へ飛んだ。滞空中に剣を抜き構える。

「…………」

レイは気付きビーム砲を撃つが、グラリスは剣でそれをはじいていく。

「終わりだ！朱雀一文字斬り！！」

グラリスは一気にコスモジェットーの右翼を斬りつけた。右翼は爆発してコスモジェットーはバランスを失い地上へ向かって落下を始めた。

1st stage 宇宙からの来訪者（後編）

緊急事態を知らせる警報がコックピット内でうるさい鳴り響いている。

「くそお…………甘かった…………」

レイは脱出用の緊急システムのボタンを探した。

「…………あつた！」

レイはそのボタンを押す。しかしシステムは作動しない。

「…………？！もう一度」

しかし作動はしない。田の前の画面を見るとERRORの文字が赤く浮かんでいる。

「そ…………そんな……俺は…………死ぬのか…………！？」

次の瞬間であつたコスモジエットーは轟音を上げて地面に衝突した。黒煙が上がつてゐる。

「コスモジエットーが！！」

ロウが真っ先に気付いた。ロウはコスモジエットーを自動操縦モードにさせると脱出装置で地面に降りた。

他の3人も気付き次々と地面に降りていく。

「隊長！…隊長大丈夫ですか！！」

4人は瓦礫となつたコスモジェットーの破片をどけながらレイを探す。

「大丈夫ですか？！」

するとそんな事を言いながら一人の青年が現れた。

「さつき何か戦闘機みたいなものが墜落してきたような…
…あなた達は…？」

青年は不思議そうにコスモアブネットースツを着用したコスモマンの4人を見ていた。

「私たちはその…」

ミウは説明に困っていた。

「私たちは宇宙人で宇宙の平和を守るコスモガーディアンだよー！」

ララが单刀直入に言つてしまつた。

「ラ…・…・ララー！」

シンがララの元へ寄る。

「他の惑星で軽々しくコスモガーディアンを名乗つてはいけないとになつてゐではないか！！」

青年は全く訳側から無そつにシンや、ララ、ミウ、ロウ達のやり取りを見ていた。

「と・・・・・と・りあえずあなたたちは宇宙人つて訳ですか・・・・・？」

青年が聞くと4人は少し困つた顔をしながら頷いた。

「・・・・・！そつだそれよりも隊長を！・・・」

ロウが言つと3人も気付いたように瓦礫をどかし始めた。

青年もとりあえず小さな自分でもどかせそうな瓦礫とかをどけ始めた。

しばらくして、人の手を青年は見つけた。

「あの・・・・人・が・こ・こ・に・い・ま・す・！・！」

青年が言つとミウが気付いた。

「本・当・？・！今・行・く・わ・！・！」

ミウが一気に瓦礫をどかす。そこには緑の地を大量に出血していた

金髪の男、レイが倒れていた。

「た・・・・・隊長！－！」

レイは目を開じたまま動かない。

「そんな・・・・・。隊長・・・・・」

ミウは変身を解きレイを見た、3人も変身を解き現れた。

「隊長・・・・・」

シンが歩み寄る。しかし先ほどと同じで動かなかった。

「・・・・・レイ・・・・・・隊長・・・・・」

「ララがそう言つてレイは何故かゆづくりであるが目を開き意識を取り戻した。

「・・・・・お・・・・・俺は・・・・・」

「隊長－－！」

レイは閉じそうな目を必死に開きながら全員を見た。

「ふ・・・・・ぢりや・・・・・ひ・・・・・おれは・・・・・もつ・・・・・
だめ・・・・・じし・・・・・」

青年と4人を見ながら話しを続ける。

「おれ…………が…………しん…………でも・おまえり…………4

にんと…………君」

青年は驚いたようにレイを見る。

「お…………俺ですか」

「ああ…………きみ…………だ…………きらかわよう煌川翔君」

「俺の名を何故…………?」

やつ言ひとレイはふつと笑った。

「わから…………ない…………そし…………てこれを…………」

レイは右腕からコスモブレイザを取り翔に差し出した。

翔はいきなりの展開に困っていた。さつき街中を歩いていれば何か変なのが出てきて、そのまま近づいてみれば宇宙人と出会つて、変なものを差し出されて…………。

「コレは何に使うんですか…………?」

翔が5人に聞く。すると!!ウが答えた。

「それは、コスモガーディアンの対宇宙囚人新兵器コスモブレイザー。それを使う事でコスモマンと戦う戦士に変身する事が出来るの」

「…………コスモマン?」

翔の問いかけに次はシンが答える。

「ああ、そのコスモマンは今上空でもがいている空中要塞生物を拠点に宇宙を荒らじてこねるトッシュドロンと戦う兵器なのだ」

「トッシュドロン…………頗る厄介なトッシュドロンとあなたたちと共に戦えと？」

レイは頷く。

「すまないと…………おもつて…………いる。しか…………しつきみ…………しかいないんだ……」

レイは一回間を置くと翔を力強く見た。

「頼む…………！」

「む…………無理ですよそんなの…………」

翔は下を向きながら行つた。

「何で俺なんすか？俺ただの就職活動控えてる大学生ですよー自衛隊とか戦闘のプロに頼めばいいじゃないですか？！」

翔が言つ。しかしレイは首を振る。

「きみ…………しか…………だめ…………なんだ」

翔は戸惑つ。

「意味わからねえ……なんなんだよ……これ」

そう翔が言つた後だつた。上空から無数の光弾が翔達6人を狙うよう地面に撃たれた。

「うわあーー！」

全員がその場から離れる。

「ちい・・・・・デッドロンがまた攻めてきたか！！」

6人の目の前にはC級囚人であるテルン星人30～40体近くの軍団が近づいてくる。

「あれは・・・・？」

翔が聞く。

「デッドロンの兵隊みたいな宇宙囚人グレンンド星人だ。知能が無くただただ戦闘しか出来ない星人でよく兵隊として使われるんだ・・・」

・

ロウが説明をした。

「どうやら・・・・戦うしかないようだ・・・・！」

シン、ロウ、ララ、ミウの4人が前に出る。

翔はまだ自分の右手の中にあるコスモブレイザーを見ることしか出

来ない。

「行くぞ！！」

シンの掛け声に3人が「オウ！」と返事をする。

「コスモエンジヤー！！！」

全員がコスモブレイザー中心の赤いボタンを押した。4人は光に包まれていった。

To
be

continued . . .

1st stage 宇宙からの来訪者（後編）（後書き）

次回予告

とうとうコスモマンとザッードロンによる戦いの火蓋が切って落とされた。

しかし、その戦いに対し自分はどうすべきかわからない煌川翔。

果たして彼は・・・?

次回 流星戦隊コスモマン 2nd stage 煌川翔

作者コメント。

はい。何とか1話投稿出来ました。

未熟です。おもしろくないかもしません。
でもおもしろくしてみせます！

2nd stage 煙川翔（前編）（前書き）

ハイ2話目です。まだ主人公は変身しません。スマセン^_^(

2nd stage 煙川翔（前編）

「コスモ Chernジャ—！！」

4人はそう叫ぶと共に光に包まれていった。

光が止むとそこには先ほどのように特殊なスーツを身にまとった4人が立っていた。

「よし！！行くぞーー！」

「おおーー！」

シンの掛け声に3人は答え迫り来る敵に向かつて走つていった。

「あいつら・・・・本当になんなんだよ・・・・

翔はただただ4人を見てそうしか言えなかつた。

それよりも今自分が置かれている状況についてさえも理解ができていなかつた。さつきまで普通に待ちの中を、ぶらぶらしていただけであるのに。

「うう・・・」

すると自分の足元で横たわつているレイが苦しそうに呻いていた。

「だ・・・・大丈夫ですか・・・・?」

とりあえずレイに対し翔は心配そうに声をかける。

「・・・・・　だい　・・・・・　じょうぶだ　・・・・・」

明らかに大丈夫ではなかつた。凄く苦しそうにしてゐる。さつきから傷からの出血が止まらないし、ドンドンと衰弱していくのが翔にもわかるくらいだつた。

「何とかしないと……どうあえずここから離れなければ……」

翔はレイの片手を掴み自分の肩に回せると身体を持ち上げて安全なところへ歩いていった。

「コスモガンナー！！」

ララ、ミウは一人で腰のホルスターから万能銃コスモガンナーを走りながら取り出す。

「いつけ～～～！」

ララはそう言って勢い良くトリガーを引く。銃口からは無数の光線が兵士に向かって放たれる。

「うよつと撃ちやすさ・・・・・まあいつか・・・・・」

ミウは少し溜息をつきながら上に跳躍して敵の中心に入った。

「ああー私の地獄のフルコースあなたたちに味あわさせてあげるわーーー！」

ミウはコスモガンナーをコスマランサーに変えて相手に切りかかつていった。

「ぐあああーーー！」

口ウは勢い良く壁に叩きつけられた。相手に思いつきり吹っ飛ばされたらしく壁にひびが入っていた。

「クソ！油断しそぎた・・・・・・！でも、負けるわけには行かない・
・・・・！」

コスマランサーをコスモガンナーに変えて床にはいつくばつたまま撃つて相手をひるませてる間に立ち上がった。

「俺は・・・負けない・・・！レイ隊長の仇だ・・・・・・！」

「ふんーおりやあーー！」

シンはどうぞんと相手を切り倒していく。どう見ても不利な状況であるが、全くそんな感じを見せずに攻撃していく。

するとシンの元に3人が来た。

「「いやあ…………そりが無い……」

ロウが少し疲労を見せた感じに息を切らしながら言つ。

「ええ……倒しても倒してもまだいるからね……」

ミウがロウに対しても言つ。

「でもお……倒さないといけないんだよね? 私たちはコスモガーディアンだから」

ララの言葉にシンは少し鼻で笑つと「ああ、そうだ」と答えた。

「ああ……なんとかしない…………ぐわああ……」

いきなり4人の元に無数の光線が放たれてきた。4人は爆発と共に吹っ飛ぶ。

「な……なんだ……?」

シンが前を見る。そこには黒い鎧で全身をまとった騎士がいた。

「あ……あれば……レイ隊長のコスマジェッターを斬つたデッドロンの奴だ……!」

ロウが叫ぶ。

「なんで……」「…………?」

ミウが言つ。

「アッシュも『テッドロンド・・・・・・倒すぞー』

そう言ってシンは立ち上がりコスモランサーを握り走って向かって言つた。

『フ・・・・・・愚かな・・・・・』

黒い鎧の戦士は静かに笑つと真に向かつて自らの剣を構えて歩みながら迎えた。

「とりあえず・・・・・・処置は済んだ・・・・・」

翔は袖で額を拭つた。翔はその辺の避難して無人となつた薬局から適当に薬品などをもつてきて書誌をしたので、レイの出血は大分止まつた。

「すまない・・・・・」

レイは今にも閉じそうな目を必死に開けて翔を見ながら言つ。翔は笑顔で首を横に振る。

「別に大したことじやないですよー・・・・・それよりもあいつらはなんなんですか？・・・その・・・『テッドロンドとか奴・・・

翔の言葉にレイは一回天井を見て一息ついてから話し始めた。

「ああ・・・・・奴らは・・・宇宙を・・・・・破滅へと・・・・導くための存在なんだ」

「宇宙を破滅・・・・・」

「ああ・・・・・そうだ、・・・・・そして・・・俺たちはそれを・・・防ぐための・・・・・組織・・・・・コスモガーディアン・・・・なんだ」

「そ・・・・・そうだったんですね」

翔はとてつもなく大きなスケールの話に驚いていた。地球外にはこんな発展した科学があり、宇宙単位で存亡を懸けた戦いが、行われていたのである。

するとレイが話を続けた。

「そして・・・・」の星で言う1世紀前くらいか・・・デッドロンの主要4幹部・・・を捕まる事に成功したんだ・・・・」

「それならもう大丈夫なんじゃ」

レイは翔の言葉に首を横に振る。

「しかし、昨日くらいか・・・・奴らは・・・・コスモガーディアンの本拠地コスモアースから・・・・逃げ出して・・・・地球へ逃亡を図ったんだ・・・・」

「そんな・・・・・・・・」

「コスモガーディアンは……4幹部の脱走でかなりの痛手を喰らい……主力部隊はほぼ壊滅……俺たちの部隊しか……まともに動けなかつた……」

「それであなたたちが……地球ヘテッドロンを倒しに来たと言うわけですね……？」

翔の言葉にレイは頷いた。

「だが……俺のこの有様……もう……命は短い……しかも……戦えないだろう……」

レイの目からは少し涙が溢れ彼の頬をすーっと流れていた。

「レイさん……」

「すまないな……翔君……俺たちが地球を守らなければならぬのに……」

翔は首を横に振った。

「あなたは立派でした……だから……もう休んで大丈夫です……」

翔はそう言って一息ついて表情を変えてレイに言い放つた。

「あなたの変わりに……僕が……僕が……『テッドロンと戦います!!』

「ぐああああ・・・・・・・・」

シンは壁に叩きつけられた。あまりの衝撃にシンはもがき苦しむ。

「シンさん！・・・・・くそお・・・・・！」

ロウがコスモガンナーを撃ちながら黒い鎧の戦士に駆け寄る。

『ふ・・・・・無駄だ・・・・・・』

黒い鎧の戦士は手にエネルギーをためて一気にロウに向かって放つ。

それは見事にロウに直撃知つてロウの身体は衝撃のためシンみたいに吹っ飛ばされた。

「どうしろってんだ・・・・・・」

ロウはその場で思わず倒れてしまう。周りを見るとすでにカラカラ、//ウまで倒れていた。

そう黒い鎧の戦士一人に4人はやられてしまったのである。

『どうした・・・・・コスモガーディアン・・・・・そんなものだつたのか・・・・・・』

黒い鎧の戦士はそんな事を言いながら静かに笑った。

「君が・・・・戦ってくれるのか・・・・・?」

レイは驚いた表情で翔を見た。翔は力強く頷く。

「…」まで聞くといつて何もするわけにはいかないですよ！」

翔は先ほど受け取ったコスモブレイザーを再び腕につけて笑顔で言
う。

「だが・・・・・君は・・・・戦いを出来るのか・・・・?」

翔はフーッと息をつくと立ち上がり柔軟をして見せた。

「まあ・・・一応格闘技とかしてたんですよ・・・まあ・・・空手ですけどね・・・」

「民間人の君に・・・・・任していいのか・・・・?」

レトセミウム。

「せつときも言つたじやないですかーー」ここまで来たらもう後には引けないですよ。やつてみせますよ！俺たちの大事な地球を悪の手にやるもんか！」

「すまない・・・・・」

「謝らないで下さいよ・・・じゃあやつさんの所に戻りますー」
待つててくださいねー」

「…………あ」

翔が駆け出そうとしたときであった。

「ちよつと待つてくれ！」

レイが翔を呼び止めた。翔が振り向く。

「どうしましたか？」

レイは自分のポケットからソリソリと何かを取り出した。

「一回しか使えないが、クレトヌ星の石で、傷を癒せる。多分あの4人のことだから結構傷ついてると思うから……」

翔は石を受け取ると笑みを浮かべてちゃんとポケットに入れた。

「じゃあいってきます」

翔はそう言つてもとの場所へと向かつて走り出した。

「頼んだぞ……翔君……」

レイは翔が去るのを確認すると静かに目を閉じた。

「うああああああ……」

爆発と共に4人はぶつ飛んで地面に叩きつけられる。その衝撃で変身が解けてしまった。

「あ・・・あああああああ！」

口ウが地面に倒れたまま呻いている。体中が痛んでいるようである。

一くづ・・・・・強い・・・・・

元の姿に戻った4人は何とか立ち上かるもののもう既に戦いほどの力がなさそうだ。

「アーティストがおこるのね……」

三十九

「これえつて・・・・・絶体絶命つて奴?」

ラガ言

一
だな

シンが語る

『おれりばあしまいだ・・・・消えうせろ!-!-!』

4人に向かって黒い鎧の騎士が手からエネルギー波を放とうとした時であった。

「ウチの子はおまえの子だよ。おまえの子だよ。」

翔が黒い鎧の騎士に横からとび蹴りをして吹っ飛ばしたのであった。

「皆ー！大丈夫か？！」

翔が言うと全員は驚いた表情で近づいてきた。

「君はわざわざの・・・」

ミウが言う。

「ええ、あー！ そ、うだコレを使つてくれつて！」

翔はレイから受け取った石を渡した。

「これは・・・？」

ロウが受け取つて言う。

「なんか傷が治るとか何とか・・・わ！」

すると石は一瞬光つてすぐに砂と化した。だが、全員は大分傷が無くなり体力が戻っていた。

「クレートヌ星の石か・・・ありがとう・・・えっと・・・」

シンが翔に聞く。

「俺は煌川翔！ 翔って呼んでくれ！」

翔が言う後ろで先ほど倒された黒い鎧の騎士が立ち上がっていた。

「く・・・・・油断したか・・・・・」

黒い鎧の騎士は5人の前に再び立ちはだかる。5人はそれに負けじと並び立つ。

「5人揃つた今俺たちは強いぜ！」

翔が言う。

「行くぞ！」

翔が叫ぶ

「おおー。」

「エスモチヨンジャーー！！！」

5人は掛け声と共にコスマチエンジヤーの赤いボタンを押して光に包まれ変身をした。

そして、光が止むと共にそこには5人の戦士が立っていた。

き・・・・・貴様ら・・・・

黒い鎧の騎士が5人の前に立ちはだかる。それに負けじと翔達5人も立ちはだかる。

「赤き炎の星の戦士！ マーズレッド！」

「蒼き水の星の戦士！
マーキュリーブルー！」

「黒き大地の星の戦士！」

サターンブラック！

「萬物之靈」

「邪悪な宇宙の悪を排除する宇宙に煌く五つ星！流星戦隊！」

5人がボーズを取り叫ぶ。

「スモール」...。」

黒い鎧の騎士は手から球を投げるとそこから先ほどのような兵士C級囚人グレンド星人がまた現れた。

「皆行くぞ！」

「おおっしー」

翔の呼びかけに全員は武器を構えてグレンド星人の集団の中心へ駆け出した。

2nd stage 眞川翔（後編）

「うおおおおおおおおお！」

翔はコスモガンナーで次々とグレンンド星人を打ち抜いて倒していく。すると背後からグレンンド星人が一体手に持ったこん棒で、翔を殴りかかるうとした。

「甘い！」

翔はそれに気付いていた。上手くかわすと右エルボーで頭部を殴ると蹴り飛ばした。

「まだまだ！！」

翔はコスモランサーにしてグレンンド星人達に向かつて切りかかった。

「はあ！！！」

コスモランサーを使いながら1体、また1体と確実にシンはグレンド星人を倒していく。

「負けない！！俺は負けない！！」

空中に飛びとシンに襲い掛かるうとしていたグレンンド星人2体がぶつかって後ろによろめくすかさずシンが空中で蹴り飛ばし後ろのグレンド星人に打撃を食らわす。

「コスモガンナー！」

次にコスモガンナーで遠くのグレンンド星人を打ち抜いた。シンは空中に飛びまた違う集団の中心に立つた。

「行くぞ！ テッドロン！！」

シンはコスモランサーにコスモガンナーを変えてグレンンド星人と戦いを再開した。

「おおつと！」

ロウはギリギリのところでグレンンド星人のこん棒による攻撃を避けた。グレンンド星人は再びロウに攻撃する。しかしロウはそれを手で止める。

「そう2回も3回も同じ攻撃は喰らわないって！ こんな俺でも学習はするんだぜ？」

そういうてこん棒を持つ手を蹴りこん棒をどつかへ飛ばすと顔面に2・3発食らわした後蹴りで一気に吹っ飛ばした。

次に振り返りながらコスモガンナーを近距離で放ちグレンンド星人を打ち抜くとグレンンド星人は爆発を起こした。

「それにもしても・・・・数が多いわな・・・・」

ロウは田の前に居るいくらかのグレンンド星人を見て呟いた。そして拳をこきこきと鳴らすと、足でリズムを取り出した。

「俺のとつておきの技分身殺法……テメーらに見せてやるぜ！」

そう言つと足のリズムをドンドンと速めてこきなんとロウが3人に分かれた。

「コレで手間は3分の一だ！！行くぜーー！」

そう言つてロウ3人ははグレンンド星人に向かつて攻撃を開始した。

「行くよララちゃんーー！」

「うん!!ウチゅんーー！」

ララとミウの二人は仲の良い長所を使い息のあつたコンビネーション技でドンドンとグレンンド星人を倒していく。

「やつたあーー！」

ララが少し油断をすると右のほうからグレンンド星人が襲い掛かってくる。

「さやああー！」

「危ないララちゃんーー！」

ミウはとつさにララに襲い掛かろうとするグレンンド星人をコスモガンナーで打ち抜く。何とかララに襲い掛かる前に撃つ事は出来、大丈夫であった。

「大丈夫……」「ララちゃん？」

「うんミウちゃん。ちょっとあたし油断しちゃった……」
「……」

といつて後頭部に手を回してミウに謝る。

「もう！戦いの最中なんだからララちゃん油断しちゃ駄目だよ！」

「は～いミウちゃん！」

そう言つて一人は再びグレンンド星人に向かってコスマガソナーレを放つた。

「つおおおおーー！」

翔は「スマラランサー」でグレンンド星人を斬りつけた。その後グレンンド星人は倒れ爆発した。

「つええーーこのスースは凄いぞーー！」

翔は自分の今の状況にとても興奮していた。彼は熱血ロボットアニメのマニアでいつか自分が地球を守る戦いに参加するのが憧れで今

まさに彼はその中にいるからであった。

『ギャアア・・・・!』

倒れていたグレンド星人が起き上がり翔に向かつて来る。

「ふん！喰らえ・・・・・・」

翔は拳を引いてスーッと息を吸う。

「バーニング連げええきいいい！－！」

翔の左右の手は無数の拳となりグレンド星人に当たつていきドンドンとその数は増える。

「ふぬううおおおおおおー！－！」

最期に渾身の一撃を食らわした。グレンド星人は思い切り吹っ飛んで爆発した。

翔はくるじと後ろを向いた。そこには黒い鎧の騎士が立つて翔を見ていた。

「さあ、あとはお前一人だぞ！－！」

『ふ・・・・コスマモンそれで勝ったつもりか！－！』

黒い鎧の騎士は手から無数のエネルギー弾を放つ。

「これで！－！」

翔は「スマランサーでエネルギー弾をはじいていく。そして最期の一個も弾き飛ばした。

「どうだ！！」

『なら・・・・勝負ーー。』

黒い鎧の騎士は右手を横に出すと大きな剣が現れた。

「ああ・・・・！」

翔もコスモランサーをぐつと構える。

そして、少しの間沈黙が流れるとい人は一氣にお互いに近づくよう駆け出した。

『朱雀高速斬り！』

「うわああああーーーーー！」

お互に斬りつけた。二人はお互に向かい合わず制止している。

「・・・・・・ぐつああああ・・・・」

翔は倒れて苦しむ、どうやら黒い鎧の騎士のほうが一枚上手だったらしい。

「翔ーー。」

4人が翔の元へ近づいてくる。

「大丈夫か？！翔の兄貴！！」

口ウが翔を助けながら立ち上がらせる。

「ああ・・・なんとか・・・・・！」

翔は口ウにお礼を言つて立ち上ると黒い鎧の騎士を睨んだ。

『・・・・・今日はここまでにしてやる・・・・・「スモマンーだが・・・だが次は倒す。それまで、その命きぢんととつておくことだ！』

「なによ……」「ノ――――――！」

そう言つてララが「スモランサーで斬りかかる」としたら黒い鎧の騎士はテレビーションで消えた。

「とりあえず・・・・この場は何とかなったな・・・・」

翔はそう言つて変身を解いたそれに続いて4人も変身を解いた。

ベボロイスはその後地球から抜け出してつきの衛生上にいた。

そのベボロイス内では先ほどの戦いを終えた黒い鎧の騎士グラリスは窓から地球を見ていた。

「「スモマンか・・・・面白い・・・・」

すると、彼の元に四幹部が現れた。

「どうだつた？ コスモガーディアン・・・・いえ流星戦隊コスモマンは？」

レイナがグラリスに聞く。グラリスはふっと微笑む。

「ブラック、ブルー、イエロー、ピンクはやはり訓練を受けてるだけがある。レッドは訓練を受けてないらしくがさつであるが・・・一番面白い・・・」

「へえ～。そうなの・・・・フフフ・・・・・」

レイナは笑つて地球を見た。

5人はレイの元へ向かって翔を先頭に走っていた。

「翔君まだなの？」

ミウが翔に聞く。

「いっただー！」

翔が言うとそこには先ほどのようにレイが横たわっていた。

「レイさんー俺たち何とか勝ちましたよー！・・・・・レイさん・・・

・・？」

翔が呼びかけてもレイは微動だにせず横たわったままである。

「どうしたんだ……レイ隊長……」

ロウがレイの元へ代つて肩をゆするがそれでも何もしない。シンがそつと近づいて脈を調べた。

「…………レイ…………隊長…………」

シンは涙を流した。

「嘘でしょ？ レイさんが死ぬわけ無いじゃん！」

フフはそつ言つが、シンは首を振る。

「…………レイ隊長はもつ…………死んでしまった…………もういらないんだ…………」

シンはそつ言つて立ち上がり、翔を見た。

「翔…………民間人の君を巻き込んですまない！ だが、それを手にしたからには……一緒にテッドロンを倒して欲しい」

「…………シン…………ああ！ 倒そつ…………レイさんの仇…………皆の仇だ！」

5人は手を重ね決意した。

まだ戦いは始まつたばかりである！頑張れコスモマン！

2nd stage 煙川翔（後編）（後書き）

次回予告

こうして翔はシン、ロウ、ララ、ミウたちと共に戦うこととなつた。

そんなこんなで翔の家で5人は共同生活をする事になる。

そんな矢先に再びテッドロンの攻撃が！！

そして、それぞれに新たな武器が！！

「これでも喰らえ！コスモバスター・ショートオーバー！」

次回 流星戦隊コスモマン 3rd stage 必殺コスモバス
ター！ お楽しみに！

3rd stage 必殺コスモバスター！（前編）（前書き）

第3話ですう～W

「朝か・・・・・まだ眠いな・・・・・」

翔は一回上半身だけをベットの上で起しつづけてボーッとしていた。

首を横に動かして時計を見ると7時を針はさしていた。

あた暗いし寝ちゃおひ

翔はそれ程ひ寝なくなつたが……

卷之三

うわああ！！！！！！！！！！

「起きた（？！翔君！」

「ああ・・・もうバツチリとね・・・」

翔はそう言つて寝室の入り口で立つて、いのうに苦笑いをすむとベッドから抜け出した。

そして、すぐに服を着替えてリビングへと足を運んだ。

ମୁଦ୍ରଣ

シンが新聞を必死に全宇宙用万能電子辞書を使い読みながら挨拶し

てきた。

「ああ・・・おはよっ」

翔がテレビをつけると次にロウが飛んできた。

「や～～～と新聞配達終わつたぜ！あー翔さんおはよっ！」

「ああ。おはよっさん」

そして翔は一回欠伸をすると洗面所に言つて顔を洗つた後台所へ向かつた。台所ではミウが朝食の準備をしていた。

「おはよっ！」翔

「おはよっ！」翔

翔は右手を上げて挨拶して冷蔵庫から牛乳を取り出してそれをコップに注ぎ一気飲みした。

そう、あの『テッドロン』地球初襲来の後シン、ロウ、ララ、ミウの4人は翔の家で住むこととなつた。幸い翔の家は家賃が安いもののなかなかの広さがあり十分に5人で過ごせていい家であった。

4人は地球人と言つ姿を装つて暮らす事となつた。

翔はもともと大学生であったのまま学生。

シンは根元ねもと真しんと名乗り、コンビニの店員として働き始め、ロウは

江花えはな 横太さうたと名乗つて新聞配達をはじめ、ララは瀬戸せと ララと名乗つてレストランで働き始め、ミウは天柳あまやなぎ 美羽みうと名乗り翔の家で5人の家事をする事となつた。

とりあえずまあ4人がしつかりと働いたりしてくれてるので生活はそこまでは困らないようである。

因みにコスモジエットたちは自動操縦モードでコスモアースへと帰つていった。

「それにしても……」江戸はテッドロンは来ないようだね

翔がトーストを食べながら言つ。

「ああ……それも少し気になるところだな……」

シンが「一ヒーをすすりながら呟く。

「まあ……来ない方がいいじゃん！」

口ウガ笑いながら言つた。翔は確かにと思い少し微笑んだ。

デッドロン4幹部とグラリスはベボロイス内で静かに集まつていた。

「まさか……コスモガーディアンの力があそこまでとはねえ……

・

レイナは腕を組みながら不機嫌そつこ言つた。

「確かに油断はしてだね」りやあ・・・・・

バンドルが頭を搔きながら言ひ。

「・・・・・・・・

グラリスは少しも喋らずただただ4人の会話を聞いているだけであった。それを見てレイナは喋つた。

「で、どうさんのおグラリスさん?」

「・・・・・なにがだ?」

「なにがつてあんたのせいで最初の地球侵攻失敗しちやつたじやない!」

「・・・・・それがどうした?」

「それがどうしたって・・・・・あなた何言つてゐるーーー!」

レイナが近づいて叫ぶ。グラリスはギリッとしてレイナを睨む。

「まだ始まつたばかりだ・・・・・そつ色々々言つても意味が無い・・・

・・!」

するとシャムンズが話し始めた。

「確かに……グラリスの言つ通りでもあるな……ではそろそろ……B級囚人を使うか？」

全員がシャムンズのほうを見る。

「え……使つかうの？」

バンドルが驚いたようにシャムンズを見る。シャムンズは頷く。

「まあ……グレンド星人だけじゃあ勝ち目が無いのはわかつたし俺は賛成だ」

「私もだ」

シャムンズ、グラリスが言った。

「じゃあ使おうよーね！ レイナ」

バンドルがレイナに言つ。

「そ……そ……そ……うね。じゃあシャムンズお願ひね」

「わかつた……」

シャムンズが指をパチンと鳴らすと5人の中心の機械から囚人が一
体現れた。

『グルアアアアアアー！』

「コイツはB級囚人、ストロン星人ゴレムスだ、さあゴレムス地球に行つて、コスママンともども破壊して来い！」

『了解しましたああああー！』

そう言つて、ゴレムスは地球へとワープしていった。

女子高生などがくつちやべつてゐる繁華街。やはり人が多く子どもなども居てにぎわつてゐる。

「・・・・・ん？」

急に上空から大きな石が「ぐるぐると落ちてきた。

「わあ！危ないぞーー！」

「逃げろおーー！」

人々が逃げる。すると、逆の方からグレンンド星人がまた現れた。

『ぐるぐる・・・・・』

「一体なんなんだあー！」

「わああああーーー！」

人々が逃げ惑う。

そしてビルの上ではストロム星人のゴレムスがその状況を見て笑っていた。

『がつはははは！逃げ惑え！叫べ！そして苦しめ！がつはははは
』

៩០៧៣០៨០៩០៧៩

5人の居る部屋から突如警報が鳴り響いた。

ん? なんだ・・これ

翔は警報を見る。するとシンはテレビをつけてチャンネルを変える
画面にはなんと町で逃げ惑う人々が映し出された。

「・・・・・デッドロンが来たか・・・・」

シンが言ひ。

じあ・・・・行かないとじあん！」

テテか両手を頬に当てていった。

一
皆行こう！

翔が言うと4人は頷き家から出た。

「…………おつとー戸締りとね」

ロウはしつかりと鍵をかけて4人を追つた。

『グツハハハハハハ！ 地球人は脆い！ 脆すぎる！…』

ゴレムスが笑い叫ぶ。すると田の前に子どもが逃げているのを見つけた。

「あ！…………ああ…………」

子どもは泣きながらゴレムスを見る。

『グツハハハハ…………お前も死ね…………』

「あやああああ……」

ゴレムスが子どもを襲おうとしたときだった。

「待て！…デッドロック！…」

『「ううん？！なんだ！…』

そこには、翔、シン、ロウ、ララ、ミウの5人が立ちはだかっていた。

『何だ貴様らは・・・・・・!』

翔は右手を前に出して構える。

「行くぞ! !」

「「「「おおう! -! -! -! -!」」」

5人は変身の準備をする。

「「「「コスモチョンジャー! ! ! !」」」

5人は赤いボタンを押してそれぞれ変身をした。

3rd stage 必殺コスモスター！（中編）

5人は光に包まれていく。そしてコスモマンとなつた5人が現れた。

「赤き炎の星の戦士！」 マーズレッド！

「蒼き水の星の戦士！」 マーキュリー！

「黒き大地の星の戦士！」 サターン！

「黄色の光の星の戦士！」 ビーナス！

「桃色の愛の星の戦士！」 プルート！

「邪悪な宇宙の悪を排除する宇宙に煌く五つ星！流星戦隊！」

5人がポーズを取り叫ぶ。

「「「「「コスモマン！」「」「」「」」

5人を見て茶色の大きな身体を使ってゴレムスがグヘグヘト笑い出す。

『「そうか・・・・・貴様らが・・・・・コスモマンか！！」』

「ああ！俺たちが「コスモマンだ！！」

マーズレッドがゴレムスを指差して叫ぶ。ゴレムスはニヤリと微笑むと黒い球を投げた。

黒い球は地面に落ちると共にグレンンド星人が大量に現れた。

『グルアアアアア・・・・・・・・・』

グレンンド星人がコスモマンのまつを見て拳を、ゴキゴキと鳴らしていく。る。

「やうはさせない！コスモランサー！」

マーキュリーブルーがコスモランサーを手に持つて構える。

「行くつカラちゃん！」

ブルートピンクがビーナスイエローに言つ。

「うん…ミウちゃん！コスモガンナーーー！」

ビーナスイエローとブルートピンクが上空へ跳んでグレンンド星人を打ち抜いていく。

「いっくぜええええ…！」

サターンブラックはドンドンと相手を蹴り飛ばしていく。

後ろからグレンンド星人が殴りかかってくるのをサターンブラックは察し下にしゃがみこむ。そのまま拳は前にいたグレンンド星人に直撃した。

「伊達に格闘技マニアじゃないんでね！」

サタンブラックはドンドンと打撃技で圧倒していた。

『ぐぬぬぬ・・・・・何をしているんだ・・・・・!』

グレンンド星人が倒されていく様子をゴレムスはいらついていた。

「くつー! 暫してるんだつたら俺が相手だ! テッドロン!」

マーズレッドがゴレムスを挑発する。

『ぐひひひ・・・・・何を・・・俺様舐めやがつて・・・・』

ゴレムスは手に力を入れ始めると大きな岩が出てきた。

『ぐりあーー!』

「そんなもの当たるか!」

マーズレッドは岩を簡単に避けると一気にゴレムスに近づく。一気に懷にもぐりこむとゴレムスの腹部へ一発入れる。

「・・・・・ハハー!」

マーズレッドが拳を引くと拳からは血がにじみ出でていた。

『ぐはははは! 俺様は宇宙一硬い岩石で出来てる事を知ってるか? 知るわけないか! グツハハハハハハ!』

ゴレムスがマーズレッドを掴むと一気に投げ飛ばす。マーズレッド

はそのまま壁に吊りつけられる。

「翔！！」

ブルートピンクが駆け寄る。

「ああ・・・・・大丈夫だ・・・・・う」

ブルートピンクはコスモランサーを変形させてコスモガンナーに変える。

「！」のぉー！喰らえコスモガンナーーー！」

コスモガンナーの銃口からビームが放たれるがゴレムスはものともしない。

『ぐつははははーーどつしたーそんな攻撃効かんぞーー』

ゴレムスが地面を叩く。すると地面の波がマーズレッドとブルートピンクの一人に襲い掛かってくる。

「きやあーー！」

ブルートピンクがひるむ。マーズレッドは立ち上がりブルートピンクをお姫様抱っこして上に飛ぶ。

「はあはあ・・・・大丈夫か？」

マーズレッドは何か安全なところに着地した。残りの3人も来た。

「あいつ……『スモガソナーフィルム』かなの?—」

サターンブラックがゴレムスを見る。

「ああ……うわあ!—」

ゴレムスが岩をドンドンと投げてきた5人は思いつきり吹っ飛ばされる。

「ぐうひ・・・・・・」

『ふん・・・・・・脆すぎる!貴様らも俺様の宇宙一の硬い体の前では無力のようだな!—』

「勝てないのか・・・・・!」

ゴレムスがドンドンと近づいてくる。その顔は悪魔のようだと笑っていた。

『これでお終いだ!—・・・・・と言いたい所だが俺のほうが限界らしい・・・』

ゴレムスの身体は岩を使はずぎて大分傷が多くなっていた。

『次ぎ会つた時には必ずお前ら5人を殺す!せめてその命大切にな!

!』

その後でゴレムスは消えた。

「待て・・・・・・クソ!」

シンはマーキュリーブルーから変身を解いた。

「あいつの体……コスモガンナー、ランサーが全然効かなかつた……」

翔が痛めた左腕を右手で支えながら言った。

「！」のままじや……私たちアイツに勝てないの？」

ララが心配そうに言った。

「ああ……何とかしないとアイツに勝てないぞ……！」

シンは、悔しそうにゴレムスの居た場所を見ていた。

「ゴレムス良くなつた！――」

ヴァルガスが嬉しそうにゴレムスの背中を叩いた。

『ちょっと……やめてくださいよ……今からだ壊れやすいんですから……まあヴァルガス様の攻撃ですけど――』

「がつはははーそつかそつか！――」

ヴァルガスは大きな口を開けて大きく笑つた。その様子を他の4人はやれやれと言つ感じで見ていた。

「全くヴァルガスは・・・・」

レイナは鼻で溜息をして首を横に振りながら笑っていた。

「だが……コスモマンの事だ次までに何か仕込んでくるだろうな……」

グラリスが言う。

「だらうねーあいつらもばかじやないしねー」

バンドルも言つ。

『だが・・・・俺様のこの体がある限りアイツに勝てるわけがない！』

「どうかね・・・・・」のまほじや勝てないっすぜ・・・

口ウが頭を抱えながら言つ。4人も頷く。

「ああ・・・・・あいつの身体は並大抵の囚人の体とは違う・・・」

シンガツルウヒトサキナガツリヒ。

「どうすんのや〜〜」

ララが足をバタバタさせながら騒ぐ。

「ハハハ、やせんな言つたつてどうなるわけじゃないわよ……」

「

ミウガのリハを落ち着かせる。

「どうすりゃあいいんだ……」

翔が言つた直後であつたコスモブレイザーが鳴り始めた。

「なんだ？」

翔がコスモブレイザーを見る。シンが目を見開いている。

「本部からの通信だ！」

全員は通信モードを起動した。

「うわらわコスモマンですー！」

シンが叫ぶ。

『いろいろ本部だーみんな喜べー遂に出来たぞ君たちの新しい武器が

』

「あ・・・・新しい武器？」

翔は不思議そうに呟いた。

3rd stage 必殺コスモバスター！（後編）

『ああー、そうだ……君たちの新しい武器「コスモウェポン」だー。』

「！」かも・・・・・・・・

「うえほん・・・・・・・？」

口ウとララが言った。

「何ですかその「コスモウェポン」って奴は？」

翔が聞く。

『「コスモウェポンはそれぞれの個人武器で「コスモランサー」、ガンナーヨリも威力は数十倍だ！」』

「す・・・・・凄いなー。」

口ウが嬉しそうに言う。本部の通信はまだ話を続ける。

『「さらにこの「コスモウェポン」5つを組み合わせると君たちの最強の武器「コスモバスター」が完成するー。』』

その話を聞いたミウが思いついたように言った。

「もしかしたらそれを使えば……あの「デッドロボン」の囚人を倒せるかもしれないわーー。」

「あ・・・・・・そうだな！勝てるかも…！」

翔がミリを見て嬉しそうに叫ぶ。

その時であった。再び警報が鳴り響いた。

「どうやら…・・・・・またあいつが来たみたいだな・・・・・」

シンが警報を睨みながら叫ぶ。

「行こーうー皆ー。」

翔がそつと5人はデッドロンの元へと向かつた。

『ぐわつはははははは…・・・あいつらが居ないから地球侵略が簡単だ
わー。』

ドンドンと人を襲つていぐグレンンド星人。それを見てゴレムスが笑
つてゐる。

「きやああああーー。」

「早く逃げろおおおおおーー。」

人々はドンドンと逃げ出す。しかしグレンンド星人はそれを追いかけしていく。

『ぐわっははは！その意氣だ！もつと苦しめり！…もつと地獄を見せろー！』

するビグレンンド星人の2・3体が青い光線で打たれ爆発した。

『ぬう？…』

「そこまでだ…！」

するとコスモレッド、マーキュリー・ブルー、サターン・ブラック、ビーナス・イエロー、プルート・ピンクの5人が居た。

『また貴様らか・・・・・・コスモマン！…』

「へー俺たちは貴様らデッドラロンから宇宙を守るためにいるからね！」

サターン・ブラックがゴレムスを指差しながら言つ。

『しかし・・・・・貴様らの武器では俺様の宇宙一の硬いボディに攻撃は出来まい！』

するとマーズ・レッドは天に手を挙げた。

「コスマウエポン！…マーズブレード！…」

するとマーズレッドの手には赤い「スモランサー」よりも強力そうな剣が現れた。

「『イツで勝負だ！』

「コスモウーポン！…マーキュリーバズーカ！…」

「コスモウーポン！…サターンブランフード！…」

「コスモウーポン！…ビーナスバトン！…」

「コスモウーポン！…ブルートアーチュリー！…」

マーキュリーブルーにはマーキュリーバズーカ、サターンブラックにはサターントンファー、ビーナスイエローにはビーナスバトン、ブルートピンクにはブルートアーチュリーがあった。

『なんだそれは・・・・・』

「これは俺たちの新しい武器だ！…行くぜ！…」

マーズレッドが叫ぶと共に全員が向かっていく。

『ぐつははは！…そんなものが効くか！…』

「そなはどつかな？…マーキュリーショットオ！…」

マーキュリーバズーカの銃口から青い光線が撃たれる。

『そんなものおお！…へらんわ！…』

そう言ってゴレムスは右手を前に突き出す。だが、手に直撃すると同時に手が爆発する。

「まだまだサターントンファアアアアアアーー！」

サターン・トントンファーブーを持つたまま一気にサターン・ブラックは「コレムスの懷に飛び込む。

「食らえーーー！」

腹部に一発サターントンファーが直撃する。

『ああああふご』

「喰らいなさい！ブルートアーチェリーシュートー！」

ブルー・トピングの放った矢がゴレムスの足に刺さる。

「がああ・・・・・・・」

ゴレムスが悲鳴を上げる。

「バトンで攻撃だよ～ん」

ジーナスイドローがバトンでシンディン指を削りてござ。

「さあ翔君！」

「オツケ———。つおおおおおおおお———！」

翔がマーズブレードを構えると、マーズブレードの刀身が炎で包まれていく。

『な・・・・なんなんだ・・・・・・』

「喰らえ！ 火星一文字・・・・・・！」

一気にマーズレッドは上空へ飛ぶ。

「斬り！ ！」

一気にゴレムスに斬りかかる。ゴレムスの体の岩が完全に崩れ落ちる。

『ぐあああ・・・・・・！』

「皆一気に決めるぜ！ コスマバースターだ！ ！」

「「「「おおいっ！」」」

5人が上空へコスマウェポンをほつると自動的に合体してコスマバスターが完成した。

「行くぜ！ ！」

マーズレッドがグリップを握る。

「エネルギーフルチャージ！」

プルート・ピンクが言う。

「銃身冷却完了」

ビーナスイエローが言う。

「標準・・・・・セット！」

マースブルーが言う。

最終準備かんりょうす！翔さん後は任せました！！

サターンハッケが言ったのを確認すると翔は引き金に指をかけた

「あああ・あああああ！」

翔が引き金を引くと一気に銃から物凄いエネルギー弾が「レムス」に目掛けて放たれた。

『うあああ・・・うああああああああ！』

直撃すると同時にゴレムスは爆発した。

「また・・・・・やられたか・・・・・」

ヴァルガスが悔しそうに地球を見ていた。

「次こそ・・・・・必ずだな・・・・・！・！」

バンドルがペロッと口を舐めた。

3rd stage 必殺コスモバスター！（後編）（後書き）

次回予告

流星戦隊に新しい武器コスモウェポンを手に入れて何とかゴレムスを倒せた！

そんな中翔は仲間を信じられない少年コウイチに出会う。

昔のトラウマに悩まされる「コウイチに翔は仲間の大切さを教えようと決意する。

そんな中、現れるティッドロンの囚人！だが、今回はいつもと違った！

「コイツ巨大化した・・・・・！」

そして現れる新しい武器巨大ロボットコスモカイザー！

翔はコウイチ少年に仲間の大切さを伝えられるのか？！

次回 流星戦隊コスモマン 4th stage 友情の力 コスマカイザー現る！

4th stage 友情の力 ロスモカイザー現る!（前編）（前書き）

4話です。まあゆつくりと見てくださいなw

4th stage 友情の力 ノスモカイザー現る！（前編）

晴れた日。 そういつ日は翔はいつも街中をのんびりと散歩するのが好きである。

「 いっやあ～～いい天気だな・・・」 いつの時はやっぱのんびりと散歩だよな・・・」

耳にはイヤホンをつけてお気に入りの曲を聴いて気分はいい。

翔は愉快な気分で前を見た。

「 おいー！」 ウイチ！ またお前のせいじゃねえか！――」

「 お前があそこでドリブルするからだよ！ パスをしつかりしりよ！――」

「 ・・・だつて・・・」

一人の少年が数人の子どもに囲まれて色々といわれているようだ。翔はそれを見てそこに駆け寄る。

「 いりー！ 君達イジメはよくないぞ！――」

翔が子ども達に言つ。

「 何だよお兄さん！ 関係ないだろ！――」

一人の少年が翔を見て無愛想に言つ。

「そうだよ！これは俺たちの問題なんだ！あつち行つてよ。」

翔は少しショックを受けるが言い返す。

「まあそうだけど、一人相手に大勢で色々言つのは駄目だぞ！かわりそうじやないか！」

「いいんだよ！こんな奴！こんな自己中なんてーもつこいや行こうぜー！」

「うん！」

そう言つて少年を一人残して他の子ども達は去つていった。

「…………ぐすん…………」

少年はべそを書きながら立ち上がつた。袖で涙をこぼり涙を拭いて鼻をすすぐとぼとぼと歩き始めた。

「ね……君

翔が呼び止める。すると少年はぐるっと向きを変えて翔を見た。

「ううと、お兄さんとサッカーしない？」

翔は少年の持つサッカーボールを指差して少年に微笑みかける。

「いじょ…………僕どうせ個人プレイしか出来ないから…………」

そう言つて翔に背を向けて下を向きながら歩いていった。

「なんだあの子・・・・?」

翔は鼻で溜息をしてまた歩き始めた。

「全くどうするんだよ・・・・!..」

ヴァルガスが物凄く重そうなバーべルを上げたり下げたりしながら叫ぶ。

「ちよつとうるさいわよー、ヴァルガス! 静かに出来ないの?」

レイナが腕を組みいらいらしながらヴァルガスに言つ。

「いいだろう!...俺の勝つてだ! 五月蠅いならお前がうせろ!..」

「何ですか? こにはあなただけの場所じゃないのよー! この筋肉牙馬鹿!」

レイナの言つた言葉を聞くとヴァルガスはバーべルを投げ捨てレイナの方を見る。

「なんだと? このクソあまが・・・・!..」

ヴァルガスが牙をむき出し戦闘形態に入る。

「良いわ・・・」の脳無し!—」

レイナはエネルギーを集め始める。

するとそんな一人を止めるように誰かが手をパンパンと叩いた。2
人はそちらを見る。

「なあにやつてんだよ。たかが2回コスママンにやられたぐらいで
そういうふうすんなよ」

バンドルが笑顔で言ひ。

「・・・・・・そうね・・・・・」

「悪いな・・・・・・・レイナ・・・・・」

「ええ・・・・・」めんたい・・・・・ヴァルガス」

バンドルがその様子を見て微笑むと地球の方を見た。

「2人とも今度はいらっしゃせないよ」

「えつ?...どう?」と?

レイナがバンドルに聞く。

「まあ・・・・・見ててよ」

バンドルは一人を見て笑った。

翔はその後も少し散歩がてらに色々と歩いていた。河原に着くとそこにはさつきの少年コウイチの姿があった。坂に座つて川を見ていた。

(それっきりの子だ……こんな所で何してるんだ?)

翔はそのまま少しだけとコウイチの所へ歩み寄った。

「なにしてんの?」

翔は「コウイチの肩を叩く、コウイチは驚いたように翔の顔を見た。

「やつらのお兄さんか……何なんか用?」

少年は素っ気無く聞く。

「なんだよ……まあさ、一人で何してんのかなって思つてさ」

「別に只ボーッとしてただだけだよ」

コウイチはそのまま聞いてまた川の方をむき溜息を漏らした。

「えつあれ……なんであんなに友達に囲まれて、色々言われてたの?」

翔がコウイチに聞くとコウイチはまた溜息をついて話を始めた。

「僕さ・・・サッカーチームに所属してるんだ・・・前はここのじやないところすんでて違うチームに所属してたんだ。そのころは僕は仲間を信じてたんだけど・・・今は信じられない・・・仲間を・・・」

「ど・・・どうして?」

「僕のいた前のチームはすっごく強くてある日県大会の決勝まで行つたんだ。勝てば全国大会で皆凄いやる気だつた。もちろん僕もね・・・」

「それで・・・?」

翔が聞く。

「でね、0・1で負けててね残り1分くらいで僕がボールを持つてたんだ。僕はドリブルで一気に相手のゴール近くまで運んで味方にパスしたんだ、その味方はエースでキャプテン。僕の心から信頼してる友達だつたんだ」

「ソイツにパスしたんだつたらいいんじゃないかな?」

翔が聞くがコウイチは首を横に振る。

「アイツに綺麗なパスを放つたよ。そしたら・・・アイツ・・・トラップミスをしてそのまま相手に取られて時間切れ。0・1で負けたんだ・・・そしたらアイツなんていつたと思う?」

「え・・・わかんないな・・・」

「『お前の下手なパスのせいで負けたんだ！……この下手くそ！』だって……もう僕何がなんだかわからなくなつて……パスするのが嫌いになつて氣付いたら一人になつてたんだ」

「そうだったのか……」

翔は目に涙を浮かべるコウイチを見て何故だか悔しかつた。

「コウイチ君……仲間を信じられないのか？」

コウイチは少しためらいながら首を傾かせる。翔は拳を握るとコウイチの肩を握つた。

「コウイチ君！仲間は大切なんだ！人間は誰も一人で何かを成す事は出来ない！でも仲間がいれば何でもできるんだ！」

「……そんなの嘘だよ！」

コウイチは叫ぶ。翔は首を振る。

「それなら……今度見せるよ……仲間の大切さを……！」

「お兄さん……」

すると急に翔のコスモブレイザーが鳴り響いた。するとシンの声がした。

『翔聞こえるか？！』

「ああー！どうしたテッドロロンか？！」

翔がシンに問う。

『ああ・・・・そつらしい・・・・すぐに来てくれー！』

「わかった！」

そう言って翔は通信を切り、翔はコウイチのほほを見た。
「ゴメン俺・・・・行かないといけないよう字が出来た今度見せる
よー！」

「え・・・・うん！」

「早く家に帰るんだよー！」

そう言って書は少年の元から離れた。

『グワッハハハハハハ！－！－！』

狼のような囚人ウルファーが大きく笑いながら町の中を歩いていた。

「うわあああー！」

「逃げろ・・・逃げろー！」

まわりではグレンド星人が民間人を襲っている。

「待て！－デシドロン－！」

『なんだ？！』

ウルファーはその声をするほうをむいた。そこには翔達5人の姿があつた。

「地球を那么简单に侵略はさせないぜー！行くぜー！」

全員が右腕を前に出す。

全員はそう言って赤いボタンを押し、光に包まれるとコスママンに変身した。

4th stage 友情の力 コスモカイザー現る！（中編）

『貴様らが・・・・コスモマンか・・・・』

ウルファーは5人を見てニヤリとわらう。

「何が可笑しい！デッドロン！」

『貴様らの命がもう少ないので思うとかわいそうでな・・・・ぐふふ・・・・ガッハハハハハ！』

ウルファーは大笑いするとコスモマンに目掛けて球を投げる。そしてそこからグレンド星人が現れた。

「やうぐると思つてたさ！コスマウェポン！」

5人は天に手を挙げてそれぞれ残すもウェポンを手にした。

「行くぜええ！」

マーズレッドはグレンド星人の大群に突っ込んでいった。

コウイチ少年は一人とぼとぼと歩いて家へ向かつて大通りの近くを歩いていた。

さつきからコウイチ少年の頭には翔の言つていた“仲間の大切さ”

が頭に鳴り響いていた。

(・・・・・仲間か・・・・・でもやつひつて結局みんな自分の事しか考えてないんだ!)

コウイチ少年は仲間と言つことを考えるだけで鬱になるのがわかつていた。

自分しか信じられなかつた、人を信じるのがいやになつた。

「コウイチ少年は自分がどうすればいいのかがわからなくなつっていた。

(・・・・・僕は・・・・・びつすりやあいいんだ?・・・・・)

すると「コウイチの東の方向で爆発音がした。」コウイチは横を向く。

「なんだ・・・・・?何があつたんだ・・・・?!

「コウイチは「」の興味に流されるままその方へと向かつて走つて行つた。

「マーズブレードの切れ味は今日も絶好調だ!—!

マーズブレードは調子よくグレンンド星人を切り倒していく。そんなマーズブレードを見てマーキュリーブルーが言つ。

「調子は良いのはいいが・・・・・あまり乱すなよ

「わかつてゐる！チームワークだよな！」

「ああ」

そしてあつという間に数十体もいたグレンンド星人をコスモマンの5人は倒してしまった。さすがにこれにはウルファーも驚いていた。

『伊達にコスマガーディアンではないんだな・・・面白いでせーー』

ウルファーは笑みを浮かべると足でリズムを取り出した。

「なんだ・・・・・アイツ？」

ブラックサターンがウルファーを見て言ひ。

「わかんないけど・・・・リズムを取つてるわね・・・・」

ブルートピンクが観察をしながら言ひ。

「じゃあどうあえずアタックしよーーー！」

ビーナスイエローはそう言ひてビーナスバトンを構えながらウルファーに向かつて走つていく。

「ちよつとーー！ワフーー！」

マーズレッドが呼び止めるがビーナスイエローはそのまま走つていく。

「まあ・・・ララのことだ大丈夫だ、それよりも観察といこうではないか・・・」

マーキュリーブルーがそう言つたのでとりあえずマーズレッドは様子を見ていた。

「ええい！ ララアタック！」

そういうてララはバトンでウルファーに突きを入れようとした。

『・・・・フフ・・・ガツハハハハハ遅いわー！』

そう言つて簡単にララのバトンを避けると簡単にビーナスイエローを吹つ飛ばした。

「さや あああああーー！」

「ララーー！」

4人がララの元へ近づく。

「えへへ・・・・・黙目だつた・・・・・」

ララが後頭部を書きながら簡単に立ち上がる。

「大丈夫なの？ ララちゃん」

ブルートピンクの問いかけにビーナスイエローは頷いた。

『ガハハハハハ！お前らのスピードビツや、遅いようだな……ビツ
やら俺様の敵ではないらしいな！』

ウルファーは再び高笑いをする。

「くそ…………」

『てことだ…………死ね！！！』

そういつてウルファーは両手からエネルギー波を放った。

「う・うわああああ！」

ゴスママンの5人はもうに喰らってしまい思いつきり吹っ飛ばされてしまった。

5人は地面に叩きつけられた強い衝撃で変身が解ける。

「へ・・・・・変身が解けた・・・・・！」

翔は自分の両手を見る。

「どうやら・・・・・油断してたみたいだな・・・・・」

シンが言つ。

「だね・・・・・・・」

口ウが言つ。その時右の方の草むらからガサつと言つ音がした。

一
あ
・
・
・
一

翔はその方向を見て思わず声が漏れてしまった。その草むらにはコウイチ少年が居たのだ。

コウイチ少年は身震いを必死に抑えていたがその我慢が一瞬切れてしまつたらしい。

翔にも気付いたのであるからもちろんウルフアイも気付いていた。

ウルフアーリーは二サイドを見つけると静かに左手を二サイドに向かた。そして手が黒い紫に光り始める。

・・・お母さん・・・怖いよ・・・

コウイチ少年はハックで頭を隠し必死に恐怖と戦っている。

『わらひただ・・・・・!』

ウルフアードの手からエネルギー弾が放たれた。

「やがてやるかああああああああ！」

翔は立ち上るとコウイチのところへ向かい全力で走りコウイチを抱き上げると床にどび頃がち落ちた。

そしてエネルギー弾は草むらで爆発を起こした。

『ちい・・・・・しぐじつたか・・・・・』

「大丈夫?」

翔が聞く。

「さつきのお兄さん・・・・・なんで」ヒヒヒ。

「ウイチが聞くと翔は笑った。

「ちょっと地球を守るためにね・・・・・見ててね、俺と・・・仲間を!」

そう言って翔は「ウイチを安全などこへ置くと4人の元へ走った。

「皆もう一度変身だ!..!」

「ああ」

「うひつす!..!」

「うん!..!」

「わかったわ!..!」

5人は再び「スモブレイザー」を構える。

「「「「「コスモチョンジャー!..!」「」」」

5人は再びコスモマンへと変身した。

『何度もやっても同じなのがわからんか！…』

ウルファーが叫ぶ。それにマーズレッドが返す。

「はん！俺たちは一秒ごとに成長するんだ！皆行くぞ！…」

『ひめせええええ…』

ウルファーは再び両手からエネルギー波を放つた。

「皆跳んで離れましょー！」

ブルーピンクの呼びかけに5人は一気に五手に別れた。

『俺から行く！マーキュリーショット！…』

マークリーブルーは空中でマークリーバズーカを放つ。

『ぐおお…・・・・・…』

ウルファーは驚いたがすぐにそれをかわす。

『そんなノロマの攻撃は効かないわ！』

ウルファーがマークリーブルーに言い放つ。

『そつか…・・・だがそれは避けられんだろうな

『ああん？！』

ウルファーが足元を見るそこにはサターンブラックがいた。

「俺のほうが速いんだよースピードスター口ウ様をなめるなよーー。」

そう言つてトンファーを使いウルファーにアップーを食らわす。

『ぐおお・・・・・ーー。』

ウルファーは足をふらつかせる。

「へんどうだーー！」

サターンブラックが言つた後ウルファーはサターンブラックを蹴り飛ばす。

『ぐああああ・・・・・ー俺のほうが速いーー。』

ウルファーが叫ぶ。

「大丈夫ーー！」

ぶつ飛ばされたサターンブラックをビーナスイエローとブルートピングが受け止めた。

「ああ・・・・・悪いな」

「大丈夫よーさあ行くわよーー。」

「すうじい・・・チームワークがいい」

「ウイイチはコスモマン 翔達の戦いを見て思わずそう感いていた。

謎の強そうな敵に向かって5人で力をあわせて戦っている。個々の特性を生かした戦いをしている。

「ウイイチ少年の胸の中の何かが熱くなっていた。

「がんばれ・・・おこいさん・・・おこいさんの仲間達・・・！」

「ウイイチは拳をぐつと握った。

「バーニング連撃！－！」

マーズレッドの無数の熱いパンチがウルファーに直撃する。

『『がああ・・・・熱い・・・・・・ぐあああああ－！－！』』

ウルファーはそう言ってひるんだ。

「皆今だ！！」

マーズレッドが4人に言つ。

「コスモバスターっすね！！」

サターンブラックがそう言つと5人は額き上空へそれぞれのコスモウェポンを放つた。

そしてコスモバスターが5人の手元へ現れた。

『ぐう・・・うああああ・・・・・』

「行くぜ・・・・・！準備はいいな！」

「ああ」

「大丈夫っす！！」

「うん！」

「いつでもいいわよ！」

マーズレッドがしつかりとコスモバスターのグリップを握る。

「喰らええええええええ！！！！！！コスモバスター・・・・・・

マーズレッドはそう言つて引き金を一気に引いた。

「シュウートオオオオオオ！！！！！」

銃口から一気に公団が放たれウルファーに直撃した。

そうしてウルフナーは爆発し全てが終わつたばずであつた。

「やつぱ・・・・・・やらないといけないみたいだね」

モニターで戦闘を見ていたバンドルが呟く。

「なにをするんだ?」

ヴァルガスがバンドルに言つた。

「シャムンズの最高傑作さ！」

そう言つてバンドルは手元のボタンを押した。

• • • • ? !

マーズレッドが上を向くと黒い雲がウルファーの残骸の上空だけに集まっていた。

「なんだ??」

サターンブラックがじっと見る。すると黒い雲から雷がウルファーの残骸に放たれた。雷のまばゆい光に全員が手で顔を隠した。

「いつたいなんなの・・・・よ・・・・・・」

ビーナスイエローは思わず言葉を失っていた。

コスモマンの5人の目の前には巨大化したウルファーが立ちはだかっていたのであった。

4th stage 友情の力 コスモカイザー現る！（後編）

雄たけびを上げるウルファーに対して、5人はただ上を見てウルファーを見上げることしか出来なかつた。

「聞いてねえぜ・・・・でつかくなるなんて・・・・」

サターン・ブランチが語る

「それに俺もたよなんたて言んたよ」

マースレッカ拳を握りながらアルバーを睨んだ。

そう言つてウルフアーは右足をあげて5人を踏み潰そうとする。

「避けておひそかに！」

マーズレッドの一聲で何とか5人は避ける事が出来たが明らかに不利な状況である。

「…………？」

ビーナスイエローが頭を抱えながら言つ。

「コスモバスターだ！！コスモバスターで攻撃だ！！」

シンが4人に呼びかけすぐさまコスモバスターの準備をする。

「行くぜ！！コスモバスター シュートオ！！！」

マーズレッドがコスモバスターの引き金を引く。銃口からはエネルギー弾が放たれる。

「行けええ！！！」

エネルギー弾は真っ直ぐ一直線に巨大化したウルファーに向かっていく。

そしてウルファーに直撃をするが

『・・・・・はん！！全く効かないわあ！ガハハハハハ！！』

ウルファーは当たった腹部を少し払うと再び高笑いしコスモマンを挑発していた。

「き・・・・・効かないのかよ・・・・・」

「どうするのお～～～～～～～～？」

「・・・・・」までなの？

「・・・・・駄目か・・・・・」

4人がそう言つて力が抜けたように地面に尻を着いてしまった。

「あ・・・・・諦めるなよ！－！」のままじゃアイツ一体に地球がやら
れちまうぞ！－！」

マーズレッドが他の4人に言つ。

「で・・・でもどうすればいいって言つの？」

ブルートピンクがマーズレッドに問う。

「そ・・・・・それは・・・・・」

マーズレッドが言葉に詰まったとき突然コスモブレイザーが大きな
音を立てて鳴り始めた。5人は通信モードへと切り替える。

『皆！－！大丈夫か？！』

その声は司令官のテルベットのものであつた。

「し・・・・・司令！－応大丈夫ですが圧倒的にこっちが不利です。
・・・」

シンがコスモブレイザーのマイク部分にそう言つ。

『そうだと思ったが、もう大丈夫だ！コスモジエットの修理が終わ
ったからそつちに転送した！』

テルベットが言つと时限の歪みが発生してそこからコスモジエ
ット5機が現れた。

「あれは……一番最初のときの戦闘機なのか?」

マーズレッドが5機の「スモジュット」を見て言つた。

「ああ・・・行くぞ！翔！」

そうマー・キュリー・ブルーが言うと5人は跳んでコスモジエットに乗った。

『何だあの戦闘機は・・・・・!!』

ウルファーは目を細めて戦闘機を睨む。

「へん！コイツの機動力をなめんなよ！···ヒヤアッホー！」

サターンブラックの乗るコスモジエットは空中旋回をしながらビームを放つ。

サターンブラックは見事に全弾をウルファーに直撃させる。

『ぐああああああああああああああああ！――――――――――――』

ウルフアーはもがき苦しむ。

「コスモジエット4・5はバランスの良い攻撃でウルファーを止める。

『ああ・・・・・・・』

ウルファーは手で払つて2機に向かつて歩き出す。

「余所見をしていいのか?」

ブルーマーキュリーの乗るコスモジエット2が背後から攻める。

『ぬうひひ・・・・・・・』

ウルファーが後ろを振り向く。そしてコスモジエット2を襲おうとする。

「な・・・・！」

油断していたコスモジエット2は避けるのにはもう間に合わない。

「ああ・・・・・危ない!」

地上で見ていたコワイチ少年が言つ。

「そうはさせない!」

コスモジエット1はコスモジエット2に墜落しないよつて体当たりしてウルファーの攻撃に自ら当たる。

「翔!――!」

マーキュリーブルーが叫ぶ。コスモプロジェクトーは右翼から黒煙を上げている。

「仲間を助けた・・・」

「コウイチは弦く。

「仲間を助けた・・・なんでだろう・・・あれ・・・なんでか・・・わかる・・・」

コウイチは不思議な感覚に包まれていた。

「コスモプロジェクトーのコックピット内では異常を知らす警報が鳴り響く。

「ち・・・何とか飛べるけどこりゃあまざい・・・」

マーズレッドは必死にレバーを引っ張り何とか上空に飛んでいる状況である。

「翔！大丈夫なの？！」

ブルートピンクの通信に入る。

「結構きついし・・・このままじゃあいつを倒せないっぽいな・・・

マーズレッドはそう言つて通信をみると再びレバーに力を入れる。

「クッソー……どうすれ……ん?」

マーズレッドはコックピットの画面に向かが映し出されてるのを見た。

「なに……コスモカイザー……?」

マーズレッドはしつかつと画面を見た。画面には5機の命体システムであるコスモカイザーシステムの事が映し出されていた。

「これなら……!……監……!」

マーズレッドが言つと全員の顔が映し出される。

「わかつてる!」

「やつまじょいぜー兄貴!」

「こりうよ~」

「これならこけるわ!」

マーズレッドは全員に答えるように頭べとコスモブレイザーを取り画面の横に装着した。

「行くぜ……流星合体だ!~!」

マーズレッドが叫ぶと5機のコスモジョットは上空に輪を作るようの一気に飛んだ。まずコスモジェット3・4が変形し脚部に変わると下半身に変形したコスモジョット2と合体するそのままコスモジ

エット3・4と合体したコスモジョット2は上半身に変形したコスマジヒット1と合体する。

次にコスモジョット5が中心を境に一つに分裂して腕になるとそのままコスモジョット1の横部分と接続するそしてコスモジョット1先頭の部分からコスモカイザー頭が出てきた。

「コスモカイザー！ リフトアップ！！」

今ここに宇宙の巨大戦士コスモカイザーが地に立った。

5人はそれぞれのコックピットから胸部のコスモカイザー用の専用コックピットへと移った。

「よし！ 皆行け！ うー！」

「ああ！」

コスモカイザーはウルファーのほうを向き歩き始めた。

『なんだか知らんが倒す！』

ウルファーも対抗するようにコスモカイザーへ向かつて歩み寄る。

『うがああああ！』

ウルファーがコスモカイザーを殴りかかるとする。しかしコスマカイザーはそれを腕で上手くかわす。その隙にコスモカイザーがウルファーに殴りかかる。

『グルアアアア！そ、うはいくか！』

ウルファーもパンチを腕で受け止める。

「へんーならいいだ、どうだー！」

コスモカイザーは腕を内側に回し相手をぶらつかせると隙を逃がさないようになりかかる。

『ぐあー。』

ウルファーはふっとばされ地面に叩きつけられた。

「よし今だー！カイザー、ソーダーーー！」

コスモカイザーの胸が開くとそこから長い刀身の剣が姿を現した。

「行くぜ！必殺！！」

コスモカイザーがぐつと力を込め構える。

「流星一文字斬り！ー！」

一気に踏み出すとコスモカイザーはウルファーを高速の速さで斬つた。

「はんーこれが俗に言つて一刀両断だぜー！」

そつマーズレッドが言つとウルファーは爆発した。

数日後。この前のように翔は河原を歩いていた。

「ああ～快晴はいいぜ～気持ちがいいな・・・」

そう言い翔はふと横を見ると少年サッカーの試合をしてるのを見た。

コウイチはボールを相手から取った。そしてドリブルでドンドンと相手のゴールに歩み寄る。

しかし、相手もそう簡単にはゴールを許さない。先に進ませないよう前に現れる。

(抜けない・・・・・!)

コウイチは周りを見回すがどうやら抜けないようだ。すると一人のフリーの少年が声をかける。

「コウイチ！パスだー！」

コウイチは声の方を向くがすぐ下を向く。

(ぱ・・・・・パスをしないと・・・・・でも・・・・)

「コウイチ！抜けないぞー！」

(・・・・・ そうだ・・・・・ 一人じゃ抜けない・・・・・ 一人じゃ勝てないんだ・・・・・ お兄さんが言つてたじやないか!)

コウイチは前を向くと上手くパスを回した。それにはチームの皆が驚いていた。

そして試合終了。

3 - 1で、コウイチの少年サッカーチームが勝利した。翔はコウイチの仲間との楽しそうな笑顔を見れてなんだか暖かい気持ちになれた。

4th stage 友情の力 コスモカイザー現る！（後編）（後書き）

次回予告

コスモカイザーで、何とか巨大化したウルファーを倒せた。

今度は町の中で怪しい隕石商人が現れた。

子どもに綺麗な隕石を売るその男。その隕石を持った子どもは性格が凶暴になり、人を襲うようになる。

謎の隕石商人の巧妙な手口にシンが挑む！

次回 流星戦隊コスモマン5th stage 謎の隕石！ シンの名推理！

お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7221d/>

流星戦隊コスモマン

2010年10月11日03時11分発行